

京都で刊行された詩誌『詩人』

堀 部 功 夫

一

『詩人』は、現物を知る人が強烈な印象を語っている。執筆者の一人であった、杉山平一は、「戦前の『四季』の再来を思わせるハイブラウな詩誌〔略〕清潔な神経の行きとどいた、高度に美しい雑誌だった」、「シツクな編集は、いかにも洒落れていて、復刻させたい雑誌である。そういう声を、ほかの人からもきいた。〔略〕大戦後早々の焼跡に、よくも、ハイブローウに、純粹な、雑誌があったことに、驚かされる。」（戦後関西詩壇回想）〔平成三・七・一『現代詩手帖』、のち加筆訂正して思潮社、二〇〇三年二月二日）、「古書店で『詩人』を見かけたら是非、買っておかれたらと思います。私もどっかで、復刻してもらおうところがないかあ思っておるんですけども、「四

季』以上のものがある六冊だと思います」（安水稔和（「と対談」）「詩誌『詩人』を中心に」（一九九七年十月三十一日刊『四季派学会論集』）と熱心に説く。一方、読者の一人であった、清水正一も「敗戦後の混沌とした暗い早春の日に、大阪駅前の本屋でこれ（『詩人』）をみたとき、しばらくはそこを離れられぬような感銘をおぼえたのも事実である。〔略〕『詩人』の目次をひらくと、杉山平一はじめ、気にかかっていた詩人、好きな詩人、親しめぬ怕い詩人、虫のすかぬ詩人、オオ！ここにこうして生きている、という感激のようなものもこみあげてくるのだ。」と回想する。

ところが、研究者は意外に冷淡である。『日本近代文学大事典第五卷』（講談社、一九七七年十一月十八日）、

「詩人」しじん 詩雑誌。昭和二三・一〜一一。全六冊。京

都矢代書店より詩専門の雑誌として長江道太郎の編集で創刊された。長江は神戸在任の竹中郁を共同編集責任者として協力を依頼し、「戦争中の詩の空白を埋めてもう一度戦前に返し中道から出発」することを思い、戦没学生の遺作、伊東静雄、マチネ・ポエティク、安部公房らの作品特集紹介を組んだりした。安西均も本誌から登場している。

(原崎孝)

を見よ。

安部公房の作品特集紹介を掲載した『詩人』なんて実在しない。どうして原崎が虚事を書いたのか。原崎は現物を確認せずに、ただ長江道太郎『詩人』始末（一九六一年八月二十五日刊『詩学』）を見て、無断リライトしたらしい。長江はその文中で、

〔略〕矢代書店〔略〕詩専門の雑誌〔略〕わたしにその編輯がまかされることになった。〔略〕わたしはそこですぐ神戸に走って〔略〕竹中郁さんに共同責任をもってもらうことを約束した。〔略〕戦争中の詩の空白をうづめて、もういちど戦前にかえし、そこから再出発することが、もっとも中道をえた方向だと信じた〔略〕戦没学生の詩の遺作をあつめたり、伊東静雄、マチネ・ポエティクの詩集、安部公房、耕治人、その他の人々の詩作品をかためて紹介も

した。〔略〕安西均さんの作品をはじめて活字にしたのも、この雑誌が最初であったと思う。〔略〕

と書いていた。これを綴りあわせ、『詩人』書誌的事項を例えば『国立国会図書館所蔵雑誌目録』か『日本近代文学館所蔵主要雑誌目録』か何かに拠って書き加えると、原崎文はほとんど出来上がるからである。

では長江が「安部公房〔略〕の詩作品をかためて紹介もした」となぜ誤を記したのか。『詩人』第六号の編集後記に当たる「補助椅子」欄で、長江は「m」の署名で「本誌にはなほ日高てる・阿部公房・則武三雄・中野明・上井正三・高城猶秀の諸氏の作品が収めきれなく次号へおくつた。」と書いている。つまり、編集段階で安部公房の詩の掲載を決定しながら、それは次号回しとされた。その『詩人』第七号がついに出ぬままになってしまったのである。第七号不刊を忘却した長江が、掲載と誤認した事情はこれで解ける。

原崎文の影響が、例えば『竹中郁全詩集』（角川書店、昭和五十八年三月七日）所載・足立卷一「解題」の、

「詩人」は昭和二十二年一月、長江道太郎編集で京都矢代書店から創刊され、十一月まで全六冊を出したが、竹中は共同編集者として協力した。同誌は戦没学生の遺作、伊東静雄、マチネ・ポエティク、安倍公房らの作品特集を組

み、終戦直後の詩の復興に貢献した。

にも浸透しているため、細事ながら注意した次第である。

この雑誌の解題紹介に前記長江『詩人』始末」を最重要参考文献とした点はよい。ただそれを鵜呑みにし、抜書きするだけではいけない。『詩人』は、国会図書館・日本近代文学館ほかに所蔵されており、珍本稀覯書の類で無く簡単に閲覧出来る。手間を省かず、現物に就くべきである。

二

細目を掲げる。

創刊号 昭和二十二年一月一日発行

〔表紙〕 倉田發 表紙

〔カット／編集責任スタッフ名〕 表紙裏

〔扉／シエストフの言葉〕 〔一〕

〔目次〕 〔二―三〕

室生犀星 枯木山／砂利路 四―六

宮野尾文平遺稿 昔はものを／喪心の日／遠日 七―一二

m 〔宮野尾文平について〕 一二

杉山平一 ミラボー橋 一三―一六

石川進 春のおとづれ／雪空 一七―一九

永瀬清子 踊りの輪 二〇―二二

馬淵美意子 雲／つまぐろうんか 二二―二四

山崎一 燕 二五

内山義郎 山／海に降る雪／山の雲／海の雲 二六―二九

大山定一 詩集について 三〇―三三、四八

三好達治 秋風に／ひとよぎり 三四―三五

野田宇太郎 落葉 三六―三七

平井弥太郎 地の頬 三八―三九

矢野玉一 瀬の音 四〇―四一

福原清 砂上の歌 四二―四三

竹中郁 ぼろの天使 四四―四五

丸山薫 深山ぐらし 四六―四八

実戸儀一 文学の外に 四九―五三

〔無署名〕 詩人本年度特輯号予告 五三

竹中郁 コクトオ解義 五四―五七

〔無署名〕 詩人第二号主要内容予告 五七

津村秀夫 弟信夫の追憶 五八―六四

〔無署名〕 公募詩について 六四

近況報告

伊東静雄 近況 六五

竹中郁 七七亭小記 六五

〔矢代書店広告〕 六五

m 卓上私語 六六

編輯部 後記 裏表紙裏

〔無署名〕 本誌購読料 裏表紙裏

〔奥付〕 裏表紙裏

〔裏表紙〕 裏表紙

第二号 二月号 昭和二十二年二月一日発行

〔表紙〕 倉田發 表紙

〔絵／公募詩選者／編輯責任スタッフ〕 表紙裏

〔扉／ダンツェルの言葉〕 〔一〕

〔目次〕 〔二―三〕

荒川龍彦 イギリス現代詩の展望第一回ヒューム以後 四

一一一

〔無署名〕 次号予告 一一一

小野十三郎 地下の夜 一二―一三

岡崎清一郎 館其の一／館其の二 一四―一六

〔無署名〕 公募詩について 一六

野田宇太郎 夜あけ／しじみ蝶 一七―一九

〔無署名〕 〔カット〕 一九

竹中郁 家の肖像 二〇―二二

ポオドレエル＋福永武彦 夕べの諧調 二二―二四

深澤紅子 林檎園の小径 二五―二九

近況雑信

小野十三郎 無季俳句 二九

杉山平一 三角／年齢 三〇―三一

貝殻手帖

郁 ブレイク詩選 三〇―三一

内山義郎 距離／生 三二―三四

深澤紅子 〔カット〕 三四

山本沖子 破れた絵本／御本のなかの少女 三五―三七

馬淵美意子 たいざんぼく（あき）／たいざんぼく（よる）

三八―三九

福永武彦 晩い湖 四〇―四一

野村英夫 司祭館 四二―四三

大山定一 散文について 四四―四七

〔矢代書店広告〕 四七

草野心平 雑雑の組（I） 四八―五〇

〔無署名〕 〔カット〕 五一

貝殻手帖

m 貝殻手帳 z氏への書簡 五一―

長江道太郎 雪 五二―五三

t 卓上私室 五四―五五

m 卓上私室 五五

〔無署名〕〔カット〕 五六

蔵原伸二郎 ほてい 五六―五七

ヘッセ十谷友幸 詩について 五八―六一

矢代書店 近刊詩集 六一

河井醉茗 現代詩史(一) 六二―六四

m 補助椅子 裏表紙裏

〔無署名〕 本誌購読料 裏表紙裏

〔奥付〕 裏表紙裏

〔裏表紙〕 裏表紙

第三号 四月号 昭和二十二年四月一日発行

〔表紙〕 倉田登 表紙

〔絵／編輯責任〕 表紙裏

〔扉／目次〕 (一)

阿部六郎 人間の恢復 二―七

平田次三郎 憂愁の精神 八―一四

矢代書店 近刊 一四

大山定一 冬日抄 一五―一七

編輯部 付記 一七

〔無署名〕〔カット〕 一七

三好達治 陶のそめ絵 一八―一九

ボオドレエル十福永武彦 ボオドレエルの詩の解説(2) 先

の世 二〇―二二

木水弥三郎 秋の雪／いほざゐ 二三

竹中郁 生きてゐる十人の友の墓碑銘 二四―二七

〔無署名〕〔カット〕 二八

丸山薫 運命／齡 二八―二九

葡萄園

藤原定 或る暮会所 三〇―三一

井上靖 渦／流星 三一―三二

杉山平一 汽車の周囲 三三―三四

北川桃雄 暮庭 三五

内山義郎 神について／火山 三六―三七

馬淵美意子 きりぎりす挽歌 三八―三九

長江道太郎 言葉 四〇―四七

〔無署名〕 次号予告 四七

〔無署名〕〔カット〕 四八

尾崎喜八 冨寒の花 四八―四九

草野心平 雑種の俎(2) 五〇―五二

〔無署名〕〔カット〕 五三

野村英夫 雲花小鳥 五三―五六

郁 木曜言 五七

m 〈詩人〉友の会通信 五七

四月作品集

吉本千織 海に向ふうた 五八―五九

无縫 閑居 五九

和知誠之助 霜夜 六〇

久野斌 雪景色 六〇

白柳鎔 河原にて 六一

選者の言葉

草野心平 選後寸感 六二

三好達治 灯下言 六二

m 卓上私室 六三―六四

〔無署名〕 公募詩について 六四

m 補助椅子 裏表紙裏

〔無署名〕 本誌購読料 裏表紙裏

〔奥付〕 裏表紙裏

〔裏表紙〕 裏表紙

第四号 五・六月号 昭和二十二年六月一日発行

〔表紙〕 倉田發 表紙

〔絵／編輯責任〕 表紙裏

〔扉／目次〕 〔一〕

〔無署名〕 〔カット〕 二

加藤周一 ヴァレリイ頌 二一九

安西均 天のシグナル 一〇

〔無署名〕 〔カット〕 一〇

〔無署名〕 〔カット〕 一一

福永武彦 純粹詩の系譜 一一―二四

矢代書店 近刊 二四

〔無署名〕 〔カット〕 二五

野村英夫 降誕祭の夜だった 二五

飯沼文字 半かけの月 二六―二七

原條あき子 髪 二七

〔無署名〕 〔カット〕 二八

貝殻手帖

高橋義孝 鵑外のこと 二八

杉山平一 ヴァレリイのドガから 二八―二九

成田成壽 清純な恋物語 二九―三〇

今官一 〈あぢる〉の壁書 三〇―三二

工藤好美 文学と文体 三二―三三

〔無署名〕 公募詩について 三三

〔無署名〕 〔カット〕 三四

耕治人 近作詩集第一回 耕治人詩抄 桃の花／白昼／鴉の
奪取／粉ふく愛人／死／柳／春菊／わたし達の暮しは頂点
にて／一旦破れる／葱／花／花 三四―四八

中島栄次郎 詩の論理と言語 四九―五七

編輯部 附記 五七

m 卓上私室 五七

草野天平 梅雨 五八

窪田啓作 エウパリノスに就いて 五九―六五

丸山豊 野鴨 六六

〔無署名〕〔カット〕 六六

〔無署名〕〔カット〕 六七

片山敏彦 紫水晶 六七―七九

耕治人 附記 七九

選者の言葉

三好達治 灯下言 八〇

草野心平 選后感 八〇

〔無署名〕 短信 八〇

m 補助椅子 裏表紙裏

〔無署名〕 本誌購読料金 裏表紙裏

〔奥付〕 裏表紙裏

〔裏表紙〕 裏表紙

第五号 昭和二十二年八月一日発行

〔表紙〕 倉田毅 表紙

〔編輯責任〕 表紙裏

〔扉／目次〕 〔二〕

SAK〔桜井康〕〔カット〕 二

藤原定 転位 二―一〇

草野心平 雑雑の俎3 一一―一四

野田宇太郎 屋上庭園第二号 一四―一八

m 短信 一八

阿部保 黄蝶を思ふ 一九

北畠八穂 近作詩集第二回 北畠八穂詩抄 雪原／北の忘れ

もの／しんじゆ／信仰／安らぎ／みんな読む本／くもり／

三つまたの木／足音のない人／むき 二〇―二七

〔無署名〕〔カット〕 二八

西脇順三郎 紀行 二八―三〇

マチネ・ポエティック 作品集第一

福永武彦 解説 三一―三二

中村眞一郎 炎 三三

窪田啓作 SONNET 三三―三四

加藤周一 月夜 三四

原條あき子 秋の歌 三四―三五

福永武彦 火の島 三五

野村英夫 眠りの誘ひ 三六

市川俊彦 ガス 三六

内山義郎 天地 三七

天野忠 夜の命 三七

長江道太郎 飾画 三八

〔無署名〕〔カット〕 三九

矢本貞幹 純粹詩論 三九―四五

藤島宇内 湖畔 四六―四八

竹中郁 動物磁気 四九―五一

m 卓上私室 五二―五三

〔無署名〕〔カット〕 五四

大山定一 オノマトペ 五四―五八

〔無署名〕 詩人次号予告 五八

杉山平一 声 五九―六二

〔無署名〕 公募詩について 六二

〔無署名〕 出版通信 矢代書店 六二

八月集

若生真佐江 御復活祭 六三

原田健次 生活 六三

小石原昭 かなしき買物 六四

選者の言葉

草野心平 選後寸感 六四

三好達治 灯下言 六四

m 補助椅子 裏表紙裏

〔無署名〕 本誌購読料金 裏表紙裏

〔奥付〕 裏表紙裏

〔裏表紙〕 裏表紙

第六号 昭和二十二年十一月一日発行

〔表紙〕 倉田焄 表紙

〔扉／目次〕 表紙裏

窪田啓作 フランス詩人研究その一 頌 レオン・ドーベル

一一九

〔無署名〕〔カット〕 一〇

伊東静雄 近作詩集第三回 伊東静雄作品鈔 はしがき／野

の夜／夕映／雲雀／訪問者／中心に燃える／夏の

終り／帰途 一〇―一六

マチス〔カット〕 一七

木水弥三郎 北緯／裾野／琴／影／春／北国 一八―一九

草野心平 雑種の俎5 石川善助のこと 二〇―二三

馬淵美意子 ありあけの月へのおもひ 二四―二五

笹沢美明 私の歌は迷つてゐる／夏の樹／部屋 二六一

二七

マチス〔カット〕 二八

富士正晴 ぶらんこ 二八―二九

長光太 擬唱 三〇―三一

マチス〔カット〕 三二

丸山薫 青春抄 虹／花／夜に／さびしい宇宙 三二―

三四

マチス〔カット〕 三五

ポオドレエル＋福永武彦 憂愁と放浪 三六―四〇

野間宏 星座の痛み 四一

安西冬衛 燕 四二―四三

山本沖子 「花の木の椅子」以後 おかあさんが死んだあ

とで／小さい風景／晴子の骨壺／月夜 四四―

四五

マチス〔カット〕 四五

野村英夫 雲・花・小鳥 四六―四八

加藤周一 四章 伊藤左千夫の主題による四つの四行詩

四九

〔無署名〕〔カット〕 四九

内山義郎 家 五〇―五一

マチス〔カット〕 五二

真壁仁 地の星／山の蝶／雲はまばゆく光をはらみ 五二―

五四

十一月集

井上エシノ からのへう 五五

无縫 ゆめのあとに 五五―五六

小石原昭 旅 五六

朝戸秋子 母の国 五六―五七

選者の言葉

草野心平 選寸感 五八

三好達治 灯下言 五八

〔無署名〕 公募詩について 五八

竹中郁 筑後柳河 五九―六四

m 卓上私室 六三

〔無署名〕 遅刊その他について 六四

m 補助椅子 裏表紙裏

〔無署名〕 本誌購読料金 裏表紙裏

〔奥付〕 裏表紙裏

〔裏表紙〕 裏表紙

三

現物を見ると、正鶴を射た杉山回想に改めて感心させられる。今は、京都で刊行された全国誌という切り口でまとめなおそう。

『詩人』は、一九四七年一月一日付けより十一月一日付けまで六冊、京都市丸太町通河原町西・矢代書店より刊行された詩雑誌である。A5判64ページ〔創刊号は66ページ、4号は80ページ〕。月刊が途中より乱れ、印刷所を替えて〔印刷者、1号2号は土山定治郎、3号以後は若林吉郎兵衛〕、対応した。編集者は、長江道太郎・竹中郁である。事務を、大谷弘・山北孝之が担当。編集室は矢代書店内に置かれたが、6号では京都市左京区下鴨宮崎町五九長江方へ移る。

京都は三大都市中、最も空襲を受けること少なく——原爆投下予定地であったためと現在では知られている——、敗戦直後、出版事業が叢生した。

矢代書店もその一つ。主人は矢代庄兵衛、京都市中京区河原町四条上ル・回天堂〔書籍小売商〕の経営者（一九四一年より）であった。一九四六年六月、出版事業に進出、左京区下鴨宮崎町に矢代書店を設立。雑誌『随筆』を創刊した。単行本を数冊刊行する。一九四七年より、丸太町通河原町西へ移転した。

長江は『詩人』創刊について、

戦争が終ったとき、わたしは京都に任んでいた。いま「骨」の同人である日本画家の佐々木邦彦さんの紹介で、たまたま矢代書店の主人を知ったことが、この雑誌の創刊の機縁であった。すでに「随筆」という月刊雑誌を、つい先日なくなったドイツ文学の小牧教授を顧問にして書店では出していたが、もひとつ文学雑誌も出してみたかったらしい、だが、書店の都合もあって、詩専門の雑誌に企劃がぎり代えられて、わたしにその編輯がまかされることになった。雑誌の題は、書店の希望もあって「詩人」ときまった。

と書く。佐々木邦彦は『随筆』にカットを描いていた。当時まだ『日本のハリウッド』の面影を持つ京都である。共同責任編集者・竹中郁はかつてシネポエムを書き、その一つ「ラグビー」を長江は『詩と詩論』で高評した。『舗道』の詩人・長江は大学卒業後、映画人であったし、杉山にも映画評論の仕事がある。

もちろん竹中は「近代風景」（大正末年北原白秋さんによって始められた雑誌）以来の先輩である。ともに『四季』に詩を発表した経験を持つ。作風は、長江が「北・冬」的、竹中が「南・夏」的といえようか、絶妙なコンビである。

一九四六年十月一日刊『随筆』の「編輯後記」に

△近刊 詩雑誌「詩人」御紹介

来る十一月下旬より、歴程派と四季派を包含しました本邦唯一の詩誌として「詩人」を発刊致す運びとなりました。

之は直接御購読を主とし、会員制度的な御購読方法をとることに致しました。必ず御期待に添ひ得ると信じます。皆様の知己、友人に御紹介の程を。御購読料 半年分 三三

円（送料共） 一年分 六五円（送料共）

と予告され、創刊号が一九四六年十二月中旬に発売された（昭和二十二年一月一日刊『隨筆』九一頁広告）。岡山の『文学祭』第四号（一九四七年一月十日刊）表紙裏に「現代詩文学の／＼あたらしき回復のために」のキャッチフレーズで広告を載せる。

『詩人』は、執筆者陣容において「歴程派と四季派を包含」方針を実施した。丸山薫・三好達治は『四季』編集者、竹中・杉山平一・伊東静雄・大山定一・蔵原伸二郎は、『四季』同人。草野心平は『歴程』編集者、藤原定・馬淵美恵子・小野十三郎・岡崎清一郎は、『歴程』同人であった。

投稿詩選者が、草野と三好。長江も詩論へ踏み出す。特集や再掲も試みた。貴重な紙を有効活用すべく、小活字を駆使し、充実した誌面を工夫する。

表紙は、国画会・倉田登の装丁である。杉山回想に「わが国の文芸雑誌の表紙は、戦前の、佐野繁次郎の手になる「文芸」

が美しいが、この京都の「詩人」の表紙の字とデザインも、それに比肩するものと私は思った。」と言う。良い出来栄であった。倉田は『歴程』執筆者であり、当時京都市左京区下鴨に在任していた。倉田・馬淵夫婦は山形市で敗戦を迎え、土井虎賀寿に招かれて入洛。下鴨西梅ノ木町・土井宅同居中の雰囲気は、青山光二の小説『われらが風狂の師』から窺われるであろう。一九四七年中に、下鴨高木町の上野氏宅二階へ脱出する。

さて『詩人』は、巻頭が室生犀星作であるように、既成大家の寄稿が目立つ。けれども、編者が既成大家をいたずらに有り難がる気になかったことは、竹中郁「木曜日」記事に明らかで、一流誌誌面を装うために並べたのではない。

逆にいうと、詩人は義理作でなく力作を『詩人』に寄せている。三好達治は、後刊の詩集『駱駝の瘤にまたがって』冒頭詩「秋風に」を、本誌に発表した（詩集収録時、総題「間人断章」を付し、詩初出第二行「うたの小琴はふりたれど」を「越路のはての草の戸に」と改訂するが）。竹中郁も、後刊の詩集『動物磁気』の書名ともなる詩「動物磁気」を、本誌に発表した（詩集収録時、第十二連「テラコッタ」を「テラカッタ」と改定）。題材に焦土と化した神戸の生気を取上げた。杉山平一も、後刊の小説集『ミラボー橋』（審美社、一九五二年九月十日）の書名ともなる「ミラボー橋」を、本誌に発表した。長江

はこれを散文詩と取り扱ったが、杉山は小説のつもりであった
 「小説集収録時、最終段落「僕は何だつまらないといふ風な軽
 い返事をしてそつぽむいた。しかしこみ上げてくる慟哭のやう
 なものを、おさへるためにしばらくだまつてゐた。」中の「し
 かし」を「そして」と改訂し、作品後の「一九四六・九・一五」
 を削除するなど本文異同が多い」。アポリネール Le pont
 Mirabeau に重ねつつ、流転する宝塚少女歌劇生徒を見て動く
 〈僕〉の心を綴った。

その他、『詩人』は、多くの詩集収録詩の初出誌となる。

三好達治「ひとよぎり」は、詩集『駱駝の瘤にまたがって』
 に収録される〔ただし、「馬おひむし」と改題。初出第二行
 「うたのあはれやものの端に」を第二行「うたのあはれや」第
 三行「ものの端に」と改行し、初出第三・四行「われらはなに
 をおふならむ／あはれときかせひとよぎり」を削除する。竹
 中郁「ぼろの天使」「家の肖像」「生きてゐる十人の友の墓碑銘」
 は、詩集『動物磁気』に収録される〔その際、「家の肖像」
 は、初出「しぼりさしの干し物張り板」を「しぼりさしの干し
 物」、「厠のかべのおちたあと」を「厠のかべのしみのあと」、
 「みんな同じだ まるで同じだ」を「みんな同じだ」、「ここ
 の」を「そつと」、「かすれた声のその返事は」を「そのしわが
 れた声の返事は」、「あたたかいのやら、すっぱいのやら」を

「あたたかいものやら、すっぱいものやら」と改定。「生きてゐ
 る十人の友の墓碑銘」は、「春山行夫」項四行目「詩人を集め
 た」を削除、「黄瀛」項六行目「そこらがもう見切り時だよ」
 を「もう見切り時だよ そこいらが」と改定。内山義郎「山」
 「距離」「火山」「天地」は、詩集『沙上の人』（木曜書房、
 一九五九年三月十二日）に収録される〔ただし、「山」初出
 「あた」を現在形「ある」と改訂し、「天地」は「戦争を越えて
 III」と改題するなど異同あり〕。野村英夫「司祭館」は、自筆
 版が詩集『司祭館』（冬至書房、一九七〇年二月十日）に載る。
 以後も詩集・全集に収録される。山本沖子「破れた絵本」「御
 本のなかの少女」は、詩集『花の木の椅子』（創元社、
 一九四七年三月十五日）に収録される。安西均「天のシグナ
 ル」は、詩集『花の店』（学風書院、一九五五年十一月五日）
 に収録される〔改定は表記上のみ〕。
 など。

詩集だけでなく小説にも成長した例は、井上靖の散文詩
 「渦」「流星」である。「渦」の、南紀鬼ヶ城から帰った「私」
 が「そこ遠い熊野灘の一隅の黯い潮の流動〔略〕くろい潮のお
 もてに隠見してゐるに違ひない名知らぬ藻の、この世ならぬ碧
 りの切なさを見つめてみると、真実、いつか鬼以外の何もので
 もなくなつてゐる己が心に冷く思ひ当るのであつた。」を、小

説『黯い潮』（一九五〇年七月〜十月刊『文藝春秋』）では、K新聞社で下山事件デスクを担当する主人公が「黯い潮の流動する中に、時折隠頭する青い藻の動きを見詰めているような、暗い、しかし静かな、それはどこか祈りに似た感情」を持つところに活かされる。散文詩「渦」は、詩集『北国』（創元社、一九五八年五月十五日）に収録される（初出の誤植を訂正し、「静かなる」を「静かな」、「暗褐色の岩礁の」を「暗褐色の」などと改訂して）。

『詩人』は、埋没寸前の先人作品を拾った。

宮野尾文平の遺作を載せる。戦没学生・宮野尾文平については花木正和『戦争と詩人』（蜘蛛出版社、一九八一年八月三十日）に詳しい。

中島栄次郎の遺作——掲載時点では行方不明——を載せた。

不明示の初出は、昭和八年七月一日刊『思想』に沖崎猷之助名義で発表した「詩の論理と言語」である（ドイツ語の綴りなどに誤植が生じ、表記上の改訂も多いが、略）。中島栄次郎については野田又夫解題『中島栄次郎著作選』（澤森芙紗子・鈴木真理子、一九九三年十一月五日）に詳しい。

矢本貞幹「純粹詩論」も再録である。不明示の初出は、一九三四年六月一日刊『文化』。その「まえがき」「一」部分である（「異同が夥しい」。のち『矢本貞幹芸芸論集』（研究社出

版、一九八五年五月二十五日）に収録される。

耕治人の、当時未集成の詩集を試みる。今は『耕治人全詩集』（武蔵野書房、一九八〇年九月三十日）に収められる。同書「自筆年譜」昭和二十二年項に「京都の矢代書店発行の『詩人』（五・六月合併号）に、未発表、既発表の詩を含め十一編を発表できたのは、編集者の長江道太郎氏のご好意による。留置場で全身にできた疥癬の後遺症に悩みながら、まとめた。」と回想する。

『詩人』は、勿論、新人を掘り起こした。

飯沼文をデビューさせる。飯沼は、「戦後 京都で『詩人』という詩の雑誌を本屋の店頭で見かけた飯沼が、その編集者である長江道太郎さんのところへシンゾウにも 私の詩を持ちこんだというところで、長江さんと私とのかかわりが始まったのである。下鴨のお宅にうかがったのは三十八年も前のことになる。」と回顧する（「飾画」（一九八五年十二月一日刊『歷程』））。

「安西均さんの作品をはじめて活字にした」云々は、長江の誤解である。ただ『講座・日本現代詩史第四卷』（右文書院、一九七三年十一月三十日）で小川和佑「戦後の抒情詩」が言うように「安西の戦後の詩がはじめて広い読者の目に触れたのは」本誌によってであった。

前記のごとく安倍公房特集は日の目を見なかった。第七号が出ていけば安部公房著作の活字第一作掲載誌という栄誉を担えただけに、残念である。阿部六郎の推薦があったためかとも思うが、安倍詩の掲載決定は英断であった。『詩人』編集者の先見の明を証明する。

四

『詩人』が、印刷事情のため別誌に抜かれたにしろ、「マチネ・ポエティック 作品集第一」を掲載したこと、その意義の大きさは既に知られている通り。

いかにしてそれが可能であったか。

まず、福永と長江、矢代の関係がそれを準備した。福永武彦に拠れば、

戦争の終わった後に私は北海道の帯広市にいて、中学校の英語教師をしながら小説やエッセイやらを書いていた。その頃京都の矢代書店から「詩人」という雑誌が出ていて、その編輯長の長江道太郎氏とたびたび文通することになった。長江氏とは恐らく会ったこともなく、こちらから詩やエッセイを送り、向うからは返事が来るというだけの間柄だったが、長江氏の熱っぽい手紙に段々に引き込まれて、ボードレールについての長いエッセイを書く約束をしてし

まった。初めは雑誌に連載する予定だったのが、いつの間にか単行本の書き下しということになった。

と言う。単行本は『ボードレールの世界』（矢代書店）、福永最初の本となる。

次に、福永の『詩人』登場である。第二号に詩二編を載せる。その一つ、「晚い湖」は、自由詩「湖上愁心」（一九三六年十一月刊『一高校友会雑誌』）を改作した押韻定型詩であった。「ヨット」「少年」「晚い湖」「沈む」「雲の旗手」「思ふ」「星」「風」「指を洗ふ」「ひとり」「少年の驕り」「いつしか」「帆」の素材は、ほとんど同じものを使うけれども「晚い湖」には、脚韻を苦労したことが一目して窺われる。すなわち、各行末（二母音一子音）が、「旗手」「はて」(ate)、「追ひ」「想ひ」(oh)、「あこがれ」「捕はれ」(are)、「とよみ」「染み」(omi)、「いつか」「行く」か」(uka)、「沈み」「湖」(umi)となっているところである。

背後の、長江の編集方針をふりかえろう。長江文に「戦争中の詩の空白をうづめて、もういちど戦前にかえし、そこから再出発する」とあった。「歷程派と四季派を包含」するとしても、戦争詩まで受け継ぐと言うわけではない。それは「空白」と切って棄てる。そして開戦以前、はるか昭和初年代の『詩と詩論』に遡及する向きを窺わす。そこに「純粹詩」との繋がり

が姿を現わす。音楽性を生命とするはずの詩への希求と云ってよい。中島栄次郎「詩の論理と言語」・矢本貞幹「純粹詩論」の旧稿再録は、まさにこの意図に沿うものである。これを継承したのが福永「純粹詩の系譜」となる。

そもそも一九二八年九月十八日刊『詩と試論』に、Henri Bremond「純粹詩論」が載った。その最後に、

Walter Pater を信ずべきであるならば（すべての藝術は音楽に接合することを熱望するものである）否、藝術はすべてを熱望する。しかも各藝術は中間にある、各々の藝術に個有であるところの魔術によつて、言葉を、調子を、色彩を、線を、熱望する。——藝術は、すべて、祈りに接合することを熱望するのである。

と述べていた。

中島論文がこれを享け、

ウォルター・ペイターが言ふ如く、「総ての藝術は不断に音楽の状態を熱望するものである。而してポエジーの完成は、一部分に於て主題の抑制、即ち意味が明確な理解のみをちをたどらずして吾々に到達すると言ふことに依存する。」と書き、矢本論文が

かくの如く詩においては意味を重要としないといふことを極端におし進めて意味を詩の中から排斥せんとする、或は

意味が欠除しても詩として可能であるとするブレモンの純粹詩論の遠い出発点を、私はペイターに見得ると思ふ。

と述べ、「ポオ——ポオドレエル——マラルメ——ヴァレリイと連続するブレモンのいはゆる『近代における純粹詩の理論家達』」の跡を辿った。

福永「純粹詩の系譜」、

僕達が十九世紀以後の近代詩を展望する時に、エドガー・ポオに発した純粹詩の観念がポオドレエルに受け継がれ、更にポオドレエルからマラルメへ、マラルメからヴァレリイへと、一つの系譜をなして流れてゐるのを見ることが出来る。

に至る。

かくして、「マチネ・ポエティック 作品集第一」が掲載された。福永、加藤周一・中村真一郎という、戦後文壇・論壇のスターも本誌に登場する。原條あき子はその典型的作品を示す。福永が「マチネ同人の詩は何れも内容的にフランス象徴詩、或は純粹詩運動の影響の下に立つてゐる」と説明する通りである。

『詩人』は彼らに作品発表の場を提供し、世界文学的視野と外国の新しい文芸思潮を紹介した。ここに長江の戦後詩「再出發」という意図は一つ実現した。

『詩人』の定価は、刊行中の一年内に六円から二十円へ高騰する。インフレのため。加えて東京の出版情況が回復し、京都での経営が悪化する。矢代書店自体はなお続いた（一九五〇年まで確認）けれども、『詩人』は廃刊のやむなきに至った。

茫々六十年、現在、

安永 「詩人」は関西の京都で出た事情もあって、これまでに知られてなかったと聞いておりますが。

杉山 ええ。

と対談されるごとく、中央から無視される。

一方京都に密着した詩史でも、先に刊行中の『詩風土』を記録しながら、『詩人』はやっと創刊の事実が知られるくらい

で、それ以上中身を顧みる記述は無い。天野隆一編『京都詩人年表』（RAVINE社、一九七三年十月一日）「昭和21年」項に「詩誌「詩人」創刊 5号発行 長江道太郎中郁編集」とのみ載るように。『詩人』が京都在任詩人を通り越して編集された、高踏性の所為であろうか。

付記 本稿は第十三回「京都における日本近代文学の生成と展開」研究会（二〇〇六年七月二十九日、佛敎大学図書館五階特別会議室）における発表に基づく。

（ホリベ イサオ 嘱託研究員）